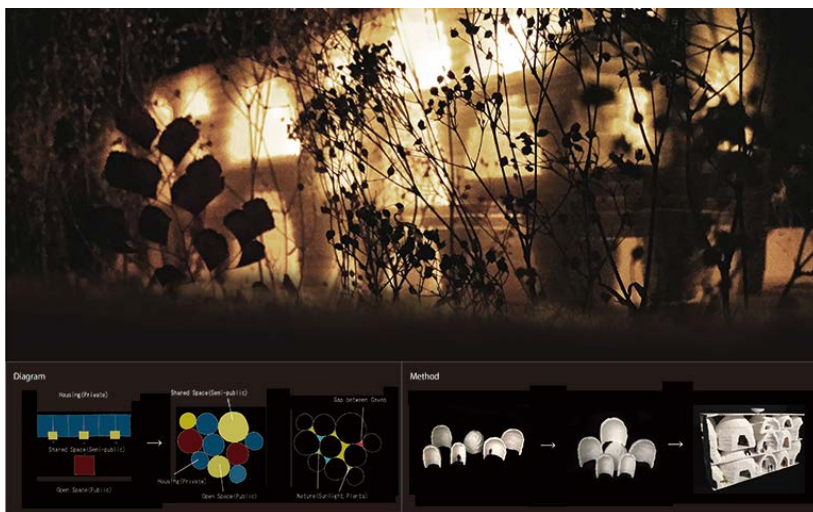


銅賞 今井 あかね君

北海道大学工学部環境社会工学科建築都市コース 「FUTURE CAVE」

壁一つ隔てて全てが隔絶する現代日本の集合住宅のあり方に疑問を抱いた作者の、「集まって住む」ための新しい建築の提案である。ドーム状のユニットを上下左右にランダムに重ねることにより、生活のための洞窟のような「内部」が生まれる。一方、連なるドームの間には「隙間」が生まれることになる。その隙間を「公」と「私」、「内」と「外」をつなぐ空間であると定義し、両者がゆるく曖昧に同居する集合住宅の空間モデルを示している。また、既存の団地群のなかにドーム状ユニットの表情が現れたファサードを持たせることで、新たな集合住宅の空間を象徴的に表現することにも成功している。新しい空間により生まれる暮らしや人間関係の豊かさがもう少し具体的に表現されていれば、さらに魅力的な提案となったと思う。今後の展開に多いに期待したい。以上を総合的に考慮して銅賞にふさわしい作品であると判断した。

(文責：小倉 征寛)



現代の集合住宅では高層型と住戸が分離されている。経済性、ゆとり確保を優先した計画である。  
個と個の間には中間の階級を再考する。洞窟型のユニットを用いて個と個の間に公共的な空間を創出する。  
公共空間と私、内部と外部の間をゆるい繋ぎを創出する。集落により異なる性質を持つ。個々のすきまは場所により微妙に異なる性質を持つ。そこには今までの集合住宅にはない生活がある。  
集落は水平方向に増殖し、地中や密着状態などによりその階級は変化する。  
個々の建物に対して集落は1つの集落として見なす。その集落を定義するは法律や経済実態である。  
建築のユニットを定義し用途を上げ、集落の階級がシステムに依存してその形を決定する。